表1　学業不振・不適応（拒否児20例）群の性格問題因子と性格類型一覧

問題因子	情緒不安定				社会不適応			非活動的		内向	非主導的		
	抑うつ性大	気分の変化大	劣等感大	神経質	主観的	非協調的	攻撃的	非活動	抑制力小	思考的内向	支配性大	服従的	
氏名	●陰気 ●悲観的 ●内気	●感情的 ●粘りがない	●自信欠乏 ●自己過少評価	●心配性 ●いらいら ●引込思案	●過敏性 ●空想的	●不満が多い ●自我強	●短気 ●社会的不適応	●気弱い ●身体を動かさない	●弱気 ●あっさりしない	●孤独 ●反省的	●社交性 ●外向大	●恥ずかしがり ●隠遁的	性格類型
1男		○		○		○	○			○	○		B′
2女			○	○				○	○	○		○	E
3男													C
4男	○	○	○		○			○				○	A
5男	○		○	○				○	○				E
6男			○										E
7男		○	○	○	○			○				○	A
8女		○	○									○	E
9男								○					C′
10男	○						○				○		A
11男	○		⊙	○	○		○				○		B′
12男	○							○				○	A
13男	○					○	○						E
14男			○									○	C
15男	○	○	○	○		○		○		○		○	F
16男		○							○	○			E
17女			○			○	○						C
18男													D
19男	○	○				○	○	○	○			○	A′
20男				○	○			○	○			○	E′
計	8	7	10	7	4	5	6	9	5	4	3	9	

性格類型

A類型（平凡な性格，知能が低い場合は無気力，受動的になりやすいタイプ）――――2名
B類型（活動的外向型で社会不適応。直接外部に表す攻撃的なタイプ）――――2名
C類型（消極的内向型で，おとなしく，目立たず小さくまとまっているタイプ）――――5名
D類型（安定積極型，情緒的にも安定し適応力もある。対人関係もうまくいくタイプ）―1名
E類型（情緒不安定，社会的不適応消極内向型でノイローゼ傾向を持つタイプ）――――9名
F類型（へそまがり型で，受験態度にも疑問がある。精密検査を必要とするタイプ）――1名

〈考察〉

図1は，矢田部達郎・ギルフォード性格検査によってまとめた二つの群の，性格因子パーセンタイル平均を比較してみたものである。（アンダーアチーバー群：来所している学業不振・不適応による登校拒否児20名。オーバーアチーバー群：現在登校している生徒，福島A中学校より20名抽出）

表1は，上記の学業不振・不適応による登校拒否児20名の性格類型と，問題因子として，標準点70パーセンタイル以上，30パーセンタイル以下の性格因子を摘出したものである。

これら二つの資料を分析しまとめてみると，おぼろげながら学業不振・不適応による登校拒否児の性格特性が明らかにされるのである。（もちろん，資料不足で断定はできないので，傾向として指摘することにとどめたい。）

まず第一に注目されるのは，情緒不安定児が多いことである。その因子をみれば，20名中約半数の者が，劣等感大・抑うつ性大・気分の変化大・神経質の性格因子を持っている。

このことは，図1において，オーバーアチーバー群と比べてみても明らかである。特に劣等感・気分の変化に差が著しい。従って，これらの子どもたちの多くは，学業生活の中で，自信を失い，いつも自分は他人より劣っているのではないかと不安になる反面，粘りもなく，さ細なことでもすぐ感情的になるという特性を持っていると考えられる。

第二に注目されるのは，非活動的・内向的・服従的であり，気が弱く，恥ずかしがり屋である反